

## 助詞ハとガの談話機能の発達

東京大学 田 原 俊 司  
和光大学 伊 藤 武 彦

### The development of discourse function in Japanese particles 'wa' and 'ga'

Shunji Tahara (*Department of Educational Psychology, Faculty of Education, University of Tokyo, Bunkyo-ku, Tokyo 113*) and Takehiko Ito (*Department of Human Science, Faculty of Humanity, Wako University, Machida, Tokyo 194-01*)

Japanese postpositional particles 'wa' and 'ga' have discourse function; 'wa' conveys old information and 'ga' marks new information. The purpose of this study was to examine experimentally the development of differentiated use of 'wa' and 'ga' according to the discourse function. Ninety subjects of 4, 5, 6, 8, 10, 12, 14 years old and adults made and told stories by looking at pictures in an elicited production task. Subjects at the age of 4 and 5 used only 'ga' regardless of context. From 6 to 12 year old subjects began to use 'wa' for the referent which appeared in the previous context, but not constantly. Fourteen-year-old subjects and adults systematically differentiated 'wa' and 'ga' according to the discourse function. 'Wa' and 'ga' appear in two-word utterance stage, but our study suggests that the complete acquisition of these two particles is very late.

Key words: language development, Japanese, discourse function, new information, old information, particles, anaphoricity, elicited production.

日本語における助詞ハとガの用法の区別は、日本人成人にとって容易にみえても、多くの外国人日本語学習者にとって困難であることが広く知られている。日本語学や言語学においてもハとガの問題をめぐる、しばしば論争がおこなわれてきているが、未だ定説をみないようである。このように習得の困難や文法的論争をひきおこす要因として、ハとガの機能が多重的、すなわち1つの助詞が複数の機能をなうことがあることが挙げられよう。文の単位で両者の機能を構文論的にみると、ガは主格を標示するが、ハは主題を表すという差異がある。すなわち、ガは名詞句を主格と標示する働きがあるが、ハは必ずしも主格にあたる名詞句に付くわけではなく（魚は私が食べた）、動詞に対する格関係から独立して文の題目を表す。また、ハには主題の他に対照の用法（Aが泳いだのに、Bは泳がなかった）があり、ガには主格の中立叙述の他に総記（または排他）の用法（〔他の誰でもなく〕私が社長です）がある（久野, 1973; 吉本, 1982）。さて本論文で問題にしようとするのは、ハとガの使用が、文と文との関係すなわち談話というレベルに基づいてどのように区別されるのかということである。談話の観点からみると、ハの付いた名詞句は旧情報を表し、ガの付いた名詞句は新情報を表すといえる。新旧情報の定義は言語学者によって様々であるが、本論文では、Chafe (1976) を参考にして、旧情報を場面あるい

は先行文脈などによって聞き手の意識にすでに導入されていると話し手に仮定されている情報、新情報を発話の時点で聞き手の意識に存在しないと話し手に仮定されている情報、と規定する。場面より自明であったり先行文脈に既出のモノは旧情報として処理されやすく、場面より自明でなかったり先行文脈に未出のモノは新情報として処理されやすい。このように、ハが旧情報を、ガが新情報を標示するという機能に基づいて使いわけができるかどうかを日本人について発達の研究し、さらにそれをハとガの他の機能の獲得と比較することは興味深い。

助詞ハとガが日本語児の発話に初出するのは大久保 (1967)、宮原・宮原 (1973, 1976)、前田 (1977) の観察によれば生後2年目である。ガは名詞句+動詞の文型で名詞に付けられているが、ハは平叙文の発話以外に“名詞+ハ?”の型で疑問文にも用いられる。幼児期のガとハの使用の脱落率について調べた Miyazaki (1979) によれば、ガは2歳10ヶ月で脱落率が大人の水準にまで低下するが、主題のハについては5歳児でも脱落率が高かった。模倣完成課題を用いた秦野 (1979) の資料によれば、新情報の名詞句にガを付けることは5歳群、旧情報の名詞句にハを付けることは7歳群より優位になっている。学童期以降におけるハとガの新旧情報による区別については林部 (1979, 1983) と近藤 (1978) の研究がある。林部は非文脈的な刺激文に対しハとガを手がかり

として新旧情報を弁別できるのは中学生以降であるという結果を得た。近藤はハとガを新旧情報に基づいて文生産できるかどうかを幼稚園児と小学校2, 4年生および大学生について調べ、大学生のみが旧情報に対しハを付けることができたことを見出した。

新旧情報の表現の発達について外国の研究を参照してみよう。Bates & MacWhinney (1979) は、さまざまな言語の2語文期に子どもが新旧情報に基づいて語順を決定する傾向があることを示した。Clancy (1984) も日本語の初期発達における語順と省略の規則性について同様の傾向があるとしている。新旧情報という談話機能に関連する問題として、インド＝ヨーロッパ語族(英, 仏, 独語等)には、先行文脈に登場したか否かによって定冠詞, 不定冠詞を使いわけるといふ文法規則(文脈指示)がある。英語児では定・不定の区別は3歳児よりおこなわれ(Maratsos, 1976), 9歳頃になって正確な区別が完成する(Warden, 1976)。Karmiloff-Smith (1979) は、フランス語児が正確に文脈指示によって定・不定冠詞を使い分けられるのは8-9歳以降であるとしている。

これらの先行研究より、新旧情報の区別それ自体は発達初期より可能であるが、その区別を文法標識——日本語においてはハとガ——を正確に用いて表現することは発達の遅い時期であるといえよう。しかし未だに、幼児期から成人に達するまでのハとガの談話機能の発達の变化が明らかになったとはいいい難く、幼児期・学童期・青年期・成人期の被験者に対して先行文脈との関連でハとガの使用の区別を調べる研究が必要である。したがって本研究は、近藤の用いた方法に改良を加え、成人期までに、ハとガの談話機能に基づく発話がいつ頃から出現し、どのような獲得過程を経て、正確な使用がいつ頃完成するかを明らかにすることを目的とする。

方 法

被験者 東京近郊の保育園年中, 年長の幼児, 小学校1, 3, 5年の児童, 中学校1, 3年の生徒各10名, 成人20名, 計90名。男女半数。平均年齢は1984年4月の実験の時点で、年中: 4歳8ヶ月, 年長: 5歳6ヶ月, 小学校1年: 6歳7ヶ月, 3年: 8歳6ヶ月, 5年: 10歳5ヶ月, 中学校1年: 12才7ヶ月, 3年: 14歳7ヶ月, 成人: 22歳6ヶ月であった。

実験材料 Fig. 1 に示す4枚の絵カード ①, ②, ③, ④ のように、①, ② ではそれぞれ異なる動物が個々に何らかの行為をし、③ では①, ② のどちらか片方の動物が他方の動物に何らかの行為をし、④ では③ で行為を受けた動物が何らかの行為をするというように設定された4枚1組の絵カードを1課題とし、3課題。具体的には、第1課題の絵カードには① にわとりがエサを食べている、② 犬が歩いている、③ 犬がにわとりを追いかける、④ にわとりが空に飛んで逃げる場面が、第2課題の絵カードには① 猫が歩いている、② ネズミが走っている、③ 猫がネズミを追いかける、④ ネズミが穴に逃げ込む場面が、第3課題の絵カードには Fig. 1 で示されているように① パンダが寝ている、② 猿が逆立ちしている、③ 猿がパンダにかみつく、④ パンダが猿をなぐる場面が、それぞれ描かれている。その他の実験材料として、ぬいぐるみの人形。おもちゃの電話機2台。ついで、電線。

手続き Fig. 2 に示す実験場面を設定し、“いまから4枚で1つの話になっている紙芝居を見せるので、ぬいぐるみの人形にその話を教えてあげてください”と被験者に求める。ただし実験中は、ついでを被験者とぬいぐるみの間に立ててしまい、ぬいぐるみの人形は絵を見ることができなくなるので、電話で話を教えてあげること、実験者が指した被指示物について話を順番につくことを教示する。なお教示は自然な日本語によっておこなわれ、ハヤガを強調することはなかった。実験者が被指示物を指さして30秒以上しても物語をつくらない場合には“どうしているの”という発話を促す問いを与え、課題開始後には、実験者はガ・ハを使わないようにした。“……しているの”という返答のみで被指示物名の欠如した文の場合には“ぬいぐるみの人形は絵が見えないので、人形にわかるように教えてあげて”という教

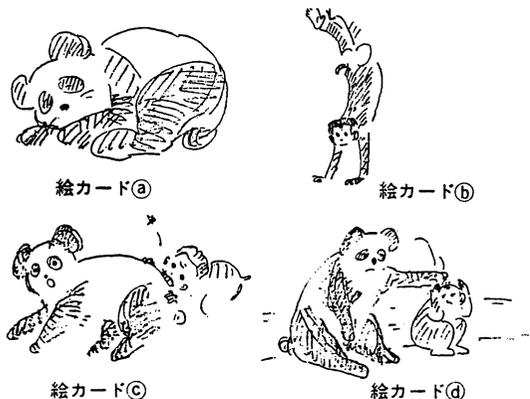


Fig. 1. 本課題で使用された絵カードの一例。

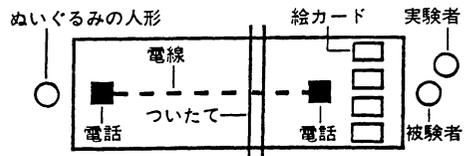


Fig. 2. 実験場面。

Table 1  
各被験者群の既出のハの出現回数の平均値の差

	5歳	6歳	8歳	10歳	12歳	14歳	成人
4歳	0.1 <sup>n.s.</sup>	1.5	3.2**	1.5	2.1**	5.2**	5.45**
5歳	—	1.4	3.1**	1.4	2.0**	5.1**	5.35**
6歳	—	—	1.7	0 <sup>n.s.</sup>	0.6 <sup>n.s.</sup>	3.7**	3.95**
8歳	—	—	—	1.7	1.1 <sup>n.s.</sup>	2.0**	2.25**
10歳	—	—	—	—	0.6 <sup>n.s.</sup>	3.7**	3.95**
12歳	—	—	—	—	—	3.1**	3.35**
14歳	—	—	—	—	—	—	0.25 <sup>n.s.</sup>

<sup>n.s.</sup> Tukey 法・Fisher 法ともに有意でない

\*\* Tukey 法・Fisher 法ともに有意 ( $p < .05$ )

無印 Tukey 法では有意であるが、Fisher 法では有意でない。

示を与え、被指示物が表現されるまでこの教示を繰り返す。実験者の被指示物の指さしの順番は、③④⑤⑥の順に行い、③④ではそれぞれの動物を、⑤では行為主の動物を、⑥では⑤で行為を受けた動物を指さす。なお、⑥に対する被験者の言及が終わったとき、実験者は⑤の被指示物を指さす前に、“(⑤の行為主)が、(⑤で行為を受ける動物)を見つけました”(括弧には動物名が実験では入る)というナレーションを入れる。このナレーションは、予備実験をふまえて、⑥から⑤への移行をスムーズにするために用いたものであり、特にガを強調することはしていない。1つの課題終了後、同様の手続きで、残り2課題を行う。

結果

本研究の課題はすでに記述したように1つの課題が4枚の絵カードから構成されているが、1, 2枚目の絵カード(それぞれ③, ④のカード)は被指示物である動物

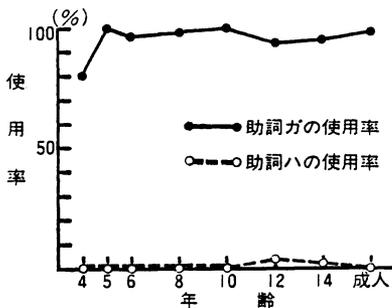


Fig. 3. 初出の被指示物の言及に使用される助詞ハ、ガの各年齢群における使用率の平均。

$$\left( \begin{array}{l} \text{初出の助詞ガ(ハ)の使用率} \\ \text{絵カード③④に対して用いられたガ(ハ)の総数} \\ \text{=} \frac{\text{絵カード③④の数(2)} \times \text{課題数(3)}}{\text{被験者数(10又は20)}} \end{array} \right)$$

が初出のもの、3, 4枚目の絵カード(それぞれ⑤, ⑥のカード)は被指示物が既出のものになっている。

Fig. 3は初出の被指示物を、Fig. 4は既出の被指示物を言及するときの助詞ハ、ガの使用率を示したものである。被指示物を言及する際、ハ、ガ以外の助詞はほとんど用いられなかった。Fig. 3より、初出の被指示物を言及するのに使用される助詞は、4歳群を除くとガの選択率が93.3%以上であった。ただし4歳群が80%と低いのは、残りの20%は助詞が省略されたためである。このような省略は他の年齢群ではほとんど見られなかった。ハはほとんど使用されず、12歳群(3.3%), 14歳群(1.7%)のみに使用が見られた。Fig. 4が示す、既出の被指示物を言及するのに使用される助詞ハ、ガの分布は相補的であるが、年齢間で差異が見られる。そこで、既出のハの使用率に関する発達の傾向をみるために、以下のような分析を行った。

まず、既出の被指示物の言及に使用される助詞ハの使用率に関して、全年齢群で1要因の分散分析(Unweighted meansによる)を行ってみると、年齢の主効果が有意であった( $F_{(7,82)}=24.00, p < .001$ )。次に各年齢間で平均値の差が有意であるかどうかを比較するためのpost-hoc testをKeppel(1982)に従い、Tukey法とFisher法で算出し、Table 1の結果を得た。Keppelによれば両テストで有意あるいは有意でない場合には統計的に判断を下せるが、一方のテストのみ有意な場合には判断を保留すべきであるとしている。この考え方に従ってTable 1の平均値の差をみると、14歳群は4-12歳のいずれの群よりも有意に使用率が高く、成人も4-12歳のいずれの群よりも有意に使用率が高い。また12歳群は4歳、5歳群よりも有意に使用率が高く、8歳群も同じく4, 5歳群に対して有意に使用率が高い。しかし、4歳群と5歳群、6歳群と10歳群、6, 8, 10歳群と

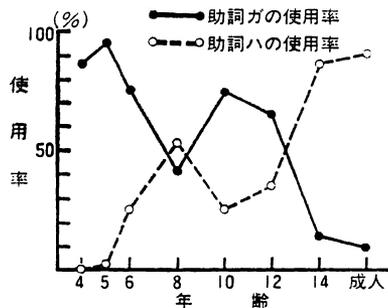


Fig. 4. 既出の被指示物の言及に使用される助詞ハ、ガの各年齢群における使用率の平均。

$$\left( \begin{array}{l} \text{既出の助詞ガ(ハ)の使用率} \\ \text{絵カード⑤⑥に対して用いられたガ(ハ)の総数} \\ \text{=} \frac{\text{絵カード⑤⑥の数(2)} \times \text{課題数(3)}}{\text{被験者数(10又は20)}} \end{array} \right)$$

Table 2

4, 6, 8, 10, 12, 14 歳の被験者群における既出のハの使用率についての傾向分析

要因	平方和	自由度	平均平方	F
(年齢)	(158.15)	(5)	(31.63)	11.46***
1次	97.32	1	97.32	35.26***
2次	1.54	1	1.54	.56
3次	45.44	1	45.44	16.46***
4次	5.16	1	5.16	1.87
5次	8.69	1	8.69	3.15
誤差	149.10	54	2.76	
全体	307.25	59		

\*\*\*  $p < .001$

12歳群, 14歳群と成人との間には有意な差はなかった。

さらに、既出の被指示物の言及に使用される助詞ハの使用率の発達のダイナミックな傾向を把握するために Fig. 4 をみると、4歳群では既出の被指示物の言及にハは使用されないこと、既出の被指示物を言及するのにハの使用がはじまるのは5歳群からであり、8歳群までハの使用率は上昇すること、しかし10歳群でハの使用率に落ち込みがみられ、再び12, 14歳群から成人にかけて上昇することがわかる。このような傾向が統計的に有意であるかどうか確かめるため、年齢が等間隔である4, 6, 8, 10, 12, 14歳の6群について、直交多項式による傾向分析 (Trend Analysis) を行い、Table 2の結果を得た。Table 2より、一次の変動 ( $F_{(1,54)}=35.26, p < .001$ ) と三次の変動 ( $F_{(1,54)}=16.46, p < .001$ ) が有意である。従って、4歳群から14歳群にかけてハの使用率は増加するが、それは単調なものではなく、山(8歳群)と谷(10歳群)のある三次曲線のような変化をすることが統計的に裏づけられた。

Table 3は1-4枚目の絵カードの被指示物にそれぞれ言及して物語をつくる際、どのような助詞を用いたかを示したものである。1枚目(㉑)、2枚目(㉒)の絵カードの被指示物を言及するのにガを、3枚目(㉓)、4枚目(㉔)を言及するのにハを使用したとすれば、“㉑㉒㉓㉔”の順番に“ガガハハ”パターンとなる。Table 3の助詞使用パターンによれば、4, 5歳群では被指示物が初出、既出にかかわらずガを用い、ほとんど“ガガガガ”パターンになっているのに、14歳以降では初出、既出を弁別し、主に“ガガハハ”パターンになっている。6-12歳群では“ガガガガ”パターンから“ガガハハ”パターンへの移行を示すかのように“ガガガハ”パターンの割合が高くなっている。それに対して、“ガガハガ”パターンはほとんど見いだされない。

なお、助詞“モ”反応は2枚目の絵カードに対しての

Table 3

課題における助詞の使用パターン

	a	b	c	d	4	5	6	8	10	12	14	成人 (年齢)
ガガガガ (モ)	18	27	17	7	19	14	2	0		(1)		0
ガガガハ (モ)	0	1	6	8	7	10	2	(1)				11
ガガハガ	0	0	1	2	0	1	0					0
ガガハハ (モ)	0	0	4	10	4	4	25	(1)	(2)	(1)		48
その他	12	2	2	3	0	1	1					1
合計	30	30	30	30	30	30	30					60

み観察された。モは品詞分類上、ハと同じ係助詞(副助詞)であるが、本実験でのモは“同類事物の提示”の機能に基づく使用であり(述部が旧情報となる)、主部を新情報とする点では、むしろガと共通の機能をもつので、Table 3ではガ(新情報)の反応の内数として分類をおこなった。

### 考 察

先行文脈に基づいて物語を伝達する課題において、ハとガの談話機能による発話がいつ頃出現し、完成するかについての結果をまとめると、以下のような3つの段階を設定することができる。

まず第1の段階は、被指示物が初出・既出にかかわらず、被指示物の言及にガを使用する段階である。この段階においては、被指示物が初出・既出にかかわらず、被指示物の言及にガを用いていることから、談話機能に基づく助詞ハ・ガの使い分けは行われていないと考えられる。就学前期(4歳群, 5歳群)の幼児がほぼこの段階に相当する。この結果は、既出の名詞句にハをつけることが就学前児では困難であるという秦野(1979)の結果と一致する。なお、この時期の子どもはハを全く使用しないわけではない。小さい幼児でも“…は…である”といういわゆる判断文に対してハの使用が観察されている(永野, 1959; 大久保, 1967 参照)。しかし、本実験の刺激文は“…が(は)…する”といういわゆる叙述文であり、主部の新旧情報に基づいて使い分けをしなければならず、この段階の子どもたちは、その使い分けができなかったと考えられる。

第2の段階は、被指示物に言及する際、初出の被指示物にガを、既出の被指示物にハを使い分けはじめるのだが、既出の被指示物に対して完全にハを用いることができない段階である。従ってこの段階の被験者は、談話機能に基づいて助詞ハ・ガを使い分けるとはいえ、その使い分けが不完全であると考えられる。小学校1年(6歳群)から中学1年(12歳群)が、ほぼこの段階に相当

する。この時期は、また田原(1984)によればハの対照用法の獲得とも一致している。

第3の段階は、初出・既出に基づいてガ・ハを完全に使い分けるようになる段階で、中学校後期(14歳群)以降がほぼこの段階に相当する。

以上のようにハとガの談話機能の出現・完成の段階を3つに分けたとき、第2段階がハ・ガの談話機能の獲得の時期と考えられるが、この時期の特徴として以下のような2つのことが明らかになった。

(1) 既出のものに対する助詞ハの使用率は年齢の増加に従って単調に増加するのではなく、10歳児群でハの使用率が落ち込む。近藤(1978)の結果でも、小学校4年生(平均年齢10歳2ヶ月)は小学校2年生(平均年齢8歳3ヶ月)よりも既出のハの使用率が落ち込んでいる。このいわば発達の“後退”現象の説明として、以下の2つが考えられる。

まず第1は、既出のハの使用率が落ち込む10歳の頃に、談話機能以外の新たな助詞ハの機能の獲得がはじまり、このためにハの談話機能とこの新たな機能との間に競合が生じ、ハの使用率が落ち込んだとするものである。田原(1984)によればハの対照用法が正確に理解されるようになるのは中学生後期以降であるが、どんな語順でもこの対照用法の理解がはじまると考えられるのがほぼ10歳の頃である。従ってハの対照用法の獲得に伴って談話機能との間に競合が生じ、談話機能としてのハの使用率が低下したのではないかとということが考えられる。

第2は、課題に対する被験者の興味と態度による説明である。助詞ハ・ガは単一の機能ではなく機能が多重的(多重機能)であることはすでに述べたが、ガの多重機能の1つに“事実の叙述用法”(松村, 1957)がある。この事実の叙述用法とは、眼前の事実をそのまま表現する場合、ガが用いられるとするものである。話し手が報告者的な態度をとって事象を記述する場合、この用法のガが用いられることが多くなることが予想される。さて、本課題に被験者の取り組み態度を見ると、6-8歳児では物語の筋に興味を示し、物語として伝達することに積極的であったのに対して、10歳以降では筋の展開に興味を示さなくなり、物語の個々の事実を記述するという態度であった。従って、6-8歳児はガとハの談話機能に基づいて物語を伝達することができるのに対して、10-12歳児においては物語の面白さの欠如のため、報告者的な話し方に基づくガの使用が増加し、その結果としてハの使用率が見かけの上では10歳で低下したと考えることができる。したがって、6歳児のハ・ガの使用率は10、12歳児とほぼ同率であり、統計上有意差がなかったが、両者の反応には質的な差があると考えられる。すなわち6歳児の使用率の低さは談話機能が獲得途上、

つまり上述の第1の段階から第2の段階への移行の時期であることを反映しているのに対して、10、12歳児では、本実験のような課題・場面で、すでに獲得されているハとガの談話機能が用いられず、むしろ“事実の叙述用法”が作用した結果なのかもしれない。しかし、14歳以降では物語としての面白さの欠如にもかかわらず、教示の意味や課題を十分に理解して物語の伝達にハとガの談話機能を導入したと考えられる。

(2) Table 3 から明らかのように、課題における助詞の使用パターンとして“ガガガハ”パターンを用いている子どもの割合が、第2段階では他の段階の子どもに比べて高い。このパターンを用いる子どもは、言及すべき既出の被指示物が2つあるのに、そのうち最初に言及したもの(3枚目の絵カードの行為主)にはハを用いず、ハを用いるのは、既出の被指示物の片方の言及が終わってからである。

注目すべきことに、談話機能に基づいてハとガを使い分けていると思われる成人群でさえ、60例中、11例に“ガガガハ”パターンが現れている。

これに対して“ガガハガ”パターン、すなわち既出の被指示物のうち、3枚目の絵カードの行為主にハを用い、4枚目の絵カードの行為主にガを用いる例は、第2段階の子どもにのみ4例見られただけであった。

それでは、どうして“ガガガハ”パターンは見られるのに対して、“ガガハガ”パターンは、ほとんど見られないのであろうか。この説明として、以下の3つが考えられる。

まず第1は、ハの対照用法に基づく説明である。本課題において、4枚目の絵カードの行為主の述部は3枚目の絵カードの行為主の述部と対照的な関係——例えばFig.1の例では、3枚目の絵カードの行為主“猿”が、パンダに“かみつく”に対して、4枚目の絵カードの行為主“パンダ”は、猿を“なぐる”——になっており、すべての被験者がそのような意味関係に基づく反応をおこなった。従って、3枚目の行為主の行為と4枚目の行為主の行為を対照・比較する気持を込めて、4枚目の絵カードの被指示物にハを使用したのではないかと考えられる。この対照・比較の文を2文に分けると、 “…は…です。…は…です”又は“…が…です。…は…です”という文にすることはできても、“…は…です。…が…です”とすると、文として不自然になる。例えば“A組は遠足に行ったが、B組は遠足に行かなかった”という対照用法の文を2文に分けると、“A組は遠足に行った。B組は遠足に行かなかった”“A組が遠足に行った。B組は遠足に行かなかった”とすることはできても、“A組は遠足に行った。B組が遠足に行かなかった”は文として不自然である。このことは、“ガガハガ”パターンより“ガガガハ”パターンが多いということの1つ

の説明となるであろう。

第2は、課題における登場動物間の関係に基づく説明である。本課題では、すでに説明したように、各々の登場動物が1, 2枚目の絵カードでは初出, 3, 4枚目で既出となるが、動物間の関係については3枚目ではじめて示される。すなわち、1, 2枚目では各々の動物——第3課題 (Fig.1) の例ではパンダとサル——が単独で描かれており、それらの動物が互いに関係し合うということについては3枚目ではじめて示される。したがって、3枚目では登場動物の関係という点で初出であるので、3枚目の動物を言及するのにガが使用されたのに対して、4枚目では動物が関係し合うことについて、3枚目ですでに既出となっているので、4枚目を言及するのにハが使用されたということが考えられる。この解釈によれば、1, 2枚目は登場する動物の紹介であり、物語は3, 4枚目で展開するので、3枚目は物語の始まりとして2匹の動物とも初出であると被験者がみなしたと考える。この考えに基づけば、初出にガを、既出にハを用いるとして、“ガガガハ”パターンが整合的に説明される。しかし、この説明では“初出＝新情報”かつ“既出＝旧情報”という考え方が前提となっている。さらに2枚目と3枚目の絵カードの間には“方法”で述べたように“…が…を見つけました”という実験者によるナレーションが入っているので、3枚目の絵カードの動物の関係は、このナレーションによって“既出化”されているという反論も成り立つであろう。

これに対して第3は、新-旧情報の概念と初出-既出の概念との差異と共通点に基づく説明である。久野(1973)が指摘したように初出-既出の概念と新-旧情報の概念は別のものであり、“初出-既出”とは先行する発話の中に、これから言及しようとする事物があったか否かで、あった場合には既出、ない場合には初出になる。これに対して“新-旧情報”とは、場面あるいは先行文脈などによって、これから言及しようとする事物が聞き手の意識にすでに導入されていると話し手に仮定されているか否かで、話し手が導入されていると仮定していれば旧情報、仮定していなければ新情報になる。

従って、これから言及しようとする事物が既出であっても、話し手が聞き手の意識に、まだその事物が導入されていないと仮定すれば新情報になる。本実験での“ガガガハ”パターンの反応は、まさに既出情報を新情報として扱った結果であると考えられよう。しかし、既出と旧情報とは区別されねばならないとはいえ、既出の回数が多ければ多いほど、より旧情報として扱われやすいという関係は否定できないであろう。

すなわち、本課題では3枚目の絵カードの被指し物を言及するとき、その被指し物に対する言及を被験者はそれ以前には1度しか行っていないのに対して、4枚目の

絵カードの被指し物を言及するときは、それ以前に2度行っている。従って、言及される回数の少ない3枚目の絵カードの被指し物を、話し手である被験者は旧情報として扱わず、言及される回数の多い4枚目の絵カードの被指し物を旧情報であるとしたのではないか。ここで注意しなければならないことは、久野(1973)が指摘するように、言及する事物が既出であっても、それが新情報ならばガが使用されるということである。従って、本課題において3枚目、4枚目の絵カードの被指し物はいずれも既出であるのだが、3枚目の絵カードの被指し物を新情報、4枚目の絵カードの被指し物を旧情報と話し手である被験者が判断したために“ガガガハ”パターンが現れたと考えることができる。これに対して、言及された回数の少ない3枚目の絵カードの被指し物を旧情報とし、言及された回数の多い4枚目の絵カードの被指し物を新情報と被験者が判断することは、ほとんどありえない。従って“ガガガハ”パターンはほとんど出現しなかったと考えることができる。

ここで研究で明らかになったことをまとめてみよう。ハとガは2語文の段階ですでに使用が開始されるが、談話機能に基づいて両者の使い分けを獲得するのは遅く、中学校後期(14歳)になってからである。助詞ハとガの談話機能の獲得が遅くなるのは、両者の機能が多重的であるためであることが示唆される。すなわち、助詞ハとガの談話機能と他の機能との間に競合が生じ、その結果として談話機能の獲得が遅れるということが考えられる。今後の課題として、談話機能をも含むハとガの複数の機能の獲得順序、及び相互関係を明らかにすることが必要である。また、“初出-既出”という文脈指示上の区別と“新情報-旧情報”という情報構造上の区別とが密接な関係を持ちながらも、同一のものとして扱ってはならないことが本研究において明らかにされた。談話構造を解明する上で重要である新旧情報の概念を、文脈指示以外の視点から実証的に検討することも今後の課題である。さらに、本実験では出現数が少ないので分析されなかった“この”“その”等の指示詞や接続詞、接続助詞の使用とハ、ガの使用との関係をみていくことも重要であろう。

## 要 約

本研究は、先行文脈に基づいて物語を伝達する課題において、ハとガの談話機能による発話がいつ頃出現し、どのような習得過程を経て完成するのかを明らかにすることが目的である。

ハとガの談話機能の出現・完成の段階として、次のような3つの段階を設定することができる。第1の段階は、被指し物が初出、既出にかかわらず、被指し物の言及にガを使用する段階である。従って、この段階はガと

ハが談話機能に基づいて使い分けられていないとすることができる。就学前期の幼児が、ほぼこの段階に相当する。

第2の段階は、初出の被指示物にガを、既出の被指示物にハを使い分けはじめるのだが、既出の被指示物に必ずしもハが用いられない段階である。従って、この段階は談話機能に基づくハとガの使い分けの獲得期と考えることができる。小学校1年—中学校1年が、ほぼこの段階に相当する。

この段階の特徴として、既出のものに対するハの使用率は年齢の増加に従って単調に増加するのではなく、10歳群で低下するという、いわば発達の“後退”現象を示す。

第3の段階は初出、既出に基づいてガとハを使い分ける段階である。従ってこの段階を談話機能に基づくハとガの使い分けの完成期と考えることができる。中学校後期以降が、ほぼこの段階に相当する。

#### 引 用 文 献

- Bates, E., & MacWhinney, B. 1979 A functionalist approach to the acquisition of grammar. In E. Ochs & B. Schieffelin (Eds.), *Developmental Pragmatics*. New York: Academic Press. Pp. 167-211.
- Chafe, W. L. 1976 Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of views. In C. N. Li (Ed.), *Subject and topic*. New York: Academic Press. Pp. 25-56.
- Clancy, P. M. (In press) The acquisition of Japanese. In D. I. Slobin (Ed.), *The crosslinguistic study of language acquisition*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- 秦野悦子 1979 子どもにおける助詞「は」「が」の獲得の研究 教育心理学研究, 27, 160-168.
- 林部英雄 1979 文における既知情報と新情報の弁別に関する発達的研究 特殊教育研究施設報告(東京学芸大学), 22.
- 林部英雄 1983 文における新-旧情報の弁別に関する発達的研究 心理学研究, 54, 135-138.
- Karmiloff-Smith, A. 1979 *A functional approach to child language: A study of determiners and reference*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Keppel, G. 1982 *Design & analysis: A researcher's handbook*. 2nd ed. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall.
- 近藤一政 1978 助詞ガとハの使い分けの発達 東京大学教育心理学科卒業論文(未公開)
- 久野 暉 1973 日本文法研究 大修館書店
- 前田紀代子 1977 乳幼児の言語発達に関する調査研究 [IV] 日本教育心理学会第19回総会発表論文集, 362-363.
- Maratsos, M. P. 1976 *The use of definite and indefinite reference in young children: An experimental study of semantic acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 松村 明 1957 江戸語東京語の研究 東京堂出版
- 宮原英種・宮原和子 1976 Language development in a young Japanese child: Mainly on the acquisition of particles 福岡教育大学紀要(教職科編), 26, 91-97.
- 宮原和子・宮原英種 1973 幼児における文法発達の諸相 日本心理学会第37回大会発表論文集, 698-699.
- Miyazaki, M. 1979 The acquisition of the particles *wa* and *ga* in Japanese: A comparative study of L1 acquisition and L2 acquisition. Unpublished master's thesis. University of Southern California.
- 永野 賢 1959 幼児の言語発達について——主として助詞の習得過程を中心に——国立国語研究所(編), ことばの研究 1 Pp. 386-396.
- 大久保 愛 1967 幼児言語の発達 東京堂
- 田原俊司 1984 助詞“は”“が”の多機能(plurifunctionality)の獲得 東京大学修士論文(未公開)
- Warden, D. A. 1976 The influence of context on children's use of identifying expressions and references. *British Journal of Psychology*, 67, 101-112.
- 吉本 啓 1982「は」と「が」——それぞれの機能するレベルの違いに注目して——言語研究, 81, 1-17.  
——1984. 7. 4. 受稿, 1985. 3. 9. 受理——